カトリック高松教区報

２０１７年１月１日（第１７６号）
発行所　カトリック高松司教区　広報委員会
〒760-0074　高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659　FAX 087-833-1484
Email
教区：catholic-takamatsu@takamatsu.catholic.ne.jp
広報：tk-koho@mxi.netwave.or.jp
生涯養成：　yousei@takamatsu.catholic.ne.jp
WEB://www.takamatsu.catholic.ne.jp/

マザー・テレサの言葉
わたしたちにとって、マリア様は喜びの源です。わたしたちに、イエス様を贈って下さったからです。わたしたちも、イエス様を贈ることによって、ほかの人々の喜びの源になることができます。

あけましておめでとうございます
―諏訪榮治郎司教　年頭あいさつ―

主の御降誕と新年おめでとうございます。昨年の「王であるキリスト」の祭日をもって「慈しみの特別聖年」の幕が閉じられました。

この閉幕ミサの中、カテドラルでは教区の各地区・ブロックから、特別聖年をどのようにとらえ、歩み祈ったのか、またどのような課題を見いだしたのかなどの分かち合いがありました。

それは聖年の終わりではなく、新たな歩みへの出発を表したミサでした。

人間の担うべき責任

思えば世界人口72億人のうち12億人のカトリック教徒が教皇様の呼びかけに答え「神の慈しみ」をこの世で生きようと祈ったのです。

そんな中、教皇フランシスコから出された回勅「ラウダト・シ」邦訳（ともに暮す家を大切に）が出版されました。

「大気、海洋、河川、土壌の汚染、生物多様性の喪失、森林破壊、温暖化、砂漠化、山積みされた廃棄物等。人間の活動が他者と全被造物とに与える影響に関する連帯と正義の観点からの考察と、しわ寄せを被る開発途上国と将来世代に対し、担うべき責任とは」との問いかけです。

人間は何のために、どのように生きるのか、教皇の訴えが身近に迫ってきます。

キリストの平和 告げ知らそう
神の知恵、神の愛からの恵み

力で平和実現できぬ

教会は1月1日を「世界平和の日」とし、聖母マリアにならってキリストの平和を告げ知らせ、すべての人の平和を祈ります。これは政治の問題のみならず、神の慈しみを生きる信仰者の課題なのです。

昨年11月「第22回・日韓司教交流会」が韓国で開催されました。テーマは「世界平和を脅かす軍需産業とメディア」でした。

その中で紹介された軍需産業の平和論は『すべての人が平和を望みます。軍需産業に携わる私たちは自分たちの作った武器を通して世界の「平和」を実現するであろうと期待しているのです。戦争は「力のバランス」が崩れるところから起こるからです。「力の不均衡」の状態から脱するために軍需産業の育成と活性化が平和を維持すると考えるのです』と、ありました。

武器の均衡による平和論には人類の自滅を感じ、背中に寒いものが走ります。

私たちキリスト者は「平和」が人間の力で実現することの難しさに気づいています。残念ですが、人類の歴史の中で平和が実現したことは一度もなかったことを知っています。

平和は力関係ではないと体験しているからです。平和は人間の知恵と力を超えた「神の知恵、神の愛」から与えられる「恵み」なのです。

聖霊の働きというべきかもしれません。自己や自国の利益を超えた他者を思いやる「共通善」や単なる「民主主義」を超えた生き方を探し求める生き方でありたいと思います。

希望をもって待つ人

私たちキリスト者は希望をもって「待つ人」です。何とかなるだろうという、他人任せの楽観主義者ではありません。

神の完成の約束に信頼し、積極的に神の心を生きることを願う「希望に生きる人」なのです。また「根気よく待つ人」です。

目の前に起こる悲しみ、苦しみ、痛みを味わい、その出来事を受け止めながら、神の御手にあることへの信頼を生きるのです。

また私たちは「今を生きる人」です。今という神との交わりの時を大切に「目を覚まし用意していなさい」のごとく、危機が迫っているような状況の中で、責任と注意を怠らずこの大地（家）を大切に生きていくのです。

今年から9月の第一主日は教皇様の心に応えて「被造物を大切にする世界祈願日」となりました。聖霊に導かれた平和に向かって世界のキリスト者とともに歩んでまいりましょう。皆さまの上に主の豊かな祝福をお祈り申し上げます。

これからの福音宣教を視野に―観音寺教会を祝別―

12月11日、観音寺教会（責任司祭・宋亨根師）で耐震工事等、改築なった聖堂の祝別式が西讃地区の信者多数と隣接の聖母幼稚園の先生方が参列して諏訪榮治郎司教主司式のもと盛大に挙行された。

１９５３年1月、最初のブルゴス会宣教師トマス・オンダラ神父、クレメンシオ・マンソ神父両師が高松に到着し、田中英吉神父（四国教区総代理）のもとで日本語を学びながら、香川県西部の状況、宣教の問題点を探る中、初期は信者の家庭でミサをたて、購入すべき土地探し等、活動拠点づくりに着手した。

その後、信徒が勧める土地の中から現在の土地を選び、１９５６年12月に司祭館と幼稚園を建てた。

初代の聖堂は幼稚園と併設され、受洗者と園児も増加し、園舎の増築と共に聖堂を幼稚園の二階に移すほどとなった。しかし、その後も手狭となってきたことから本来の聖堂を念願する信者たちが一丸となり、建設資金費を積み立て始めた。

当時、カシミロ神父様が外国の信者さん達にも寄付を願い、そのお蔭で現在の聖堂を建立することができました。

今回の耐震修理工事もマンソ神父様が残して下さった浄財もあり完成しました。

マンソ神父様・スペイン外国宣教会の神父様方に信者一同感謝しています。

観音寺教会信徒一同

ミサの中で祭壇に塗油を行う諏訪司教

高松教区助祭　ヨセフ・ゴ・ヴァン・タィン

皆様、新年あけましておめでとうございます。

この1年がみなさまにとって恵みに満ちた素晴らしい年となりますよう、お祈り申し上げます。

神のいつくしみの特別聖年を経て、２０１７年、新たな年を迎えています。いつくしみの特別聖年の実りとして、新たな年を迎えた私たちに信仰と希望が豊かにありますように祈っております。

今年は、わたくしにとっては希望の年です。子供のころからずっと、年の初めには希望をたくさん持っていました。

今年も子供の頃の気持ちと同じように、希望を抱きながら、新たな一年の計画を立て準備しています。

しかし今年は、いつもとは違い、わたくしにとっては、大きな喜びの年です。

司祭叙階へ大きな決意

それは、司祭叙階の準備をしながら司祭叙階へ向けて、大きな決意の時が始まったからです。

司祭叙階の恵みを受ける前に、一年間、色々な準備をしてきました。これまで6年間の養成期間がありましたが、昨年の4月からは神学院生活の最後の年を、この助祭コースと司牧実習に専念できたことは、とても大きな恵みでした。

哲学科1年から神学科3年までの5年の過程は学業と研修が中心でしたが、神学科6年（助祭コース）は、司牧実習が中心でした。

具体的には、様々な学校、施設、刑務所、MACやAAなどの施設や組織を訪問し、積極的に研修と研鑽を深めることが出来ました。

また、小教区での司牧上必要な事柄について、より実践的な視点から幅広く学ぶこともできました。

小教区で過ごしたこの一年は、神様から大事な意味が与えられた一年だったと感じています。

これから叙階に向けて、教会の信徒の方々や主任司祭のもとで司牧感覚を養なわせていただき、司祭叙階までのよい準備をしていきたいと思っています。

司祭は人々の心に寄り添い、人の心の最も深いところで神と出会う手伝いをし、寄り添い見とどける存在です。

ミサの説教や黙想会で聖書講話や秘跡を行うことで皆様の役に立ち、それによってより多くの人がキリストを深く知ることができるなら、司祭叙階の喜びは、さらに大きなよろこびとなると思います。

待降節はキリストの御誕生、クリスマスに向けられている期間です。待降節の間は、イエス様がいつお産まれになるのかははっきりしないけれども、確実にマリア様のお腹の中で赤ちゃんが育っています。

また、どのような顔かたちなのかは分からないけれども、時が満ちればこの世にイエス様がお生まれになって姿を現すことだけは知らされています。

まだ見えない赤ちゃんが産まれるというイメージから、人間にはまだ知ることができない神さまが用意したすばらしい未来があるということを人間に伝え、だからこそ、あきらめないで希望を持つようにと励まされる期間です。

わたくしは今、この待降節を通して、また御降誕に向けて、来年予定されている司祭叙階（２０１７年３月20日）への準備をふさわしく行うことができるように心がけ、祈っています。

これまでのわたくしの歩みを暖かく見守っていてくださった皆様に心から感謝申し上げます。これからもわたくしのためにどうぞお祈りください。

はばたき

初春のお慶びを申し上げます。今年の二月七日に高山右近の列福式が大阪城ホールで行われます。懐かしい溝部司教さまは長年の研究と深い祈りのうちに右近を尋ね求め、今回の列福にも力を尽くされていました。

今は天国で喜んでおられることでしょう。右近のことで私が特に心を惹かれるのは、「降りていく人」としての生き方です。

右近は秀吉によって城主を改易され、敗北者のように降りていき、最後にはマニラで終わる六十三年の生涯のうち、半生は追放の生活でした。

すべてを奪い取られ、迫害され、飢え、いのちの危険にさらされても苦難の生活を喜びをもって受け入れ、何ものも右近をキリストから引き離すことはできませんでした。

それはキリストに倣い、「十字架の死に至るまで従順に生きる人」の姿でした。神は降りてきた右近を通してそのご計画を推し進めていかれたのでしょう。

右近の生涯は現代の私たちに、真の幸せと、いのちの輝きを指し示してくれています。

いつの時代も、苦しむ人々の救いは「降りていく人」を通して始められています。

いつくしみ深い方が定められた変わることのない不思議なしくみです。

現代の教会が、そして私たち一人ひとりが右近のように降りていく人の一人にならなければと思います。

そこにキリストがおられますから。今年も教区の皆様の上に主の平安がありますように。

修道院紹介

聖ドミニコ宣教修道女会
新居浜修道院

神さまと共に生き生きと幼児教育

にこやかに居並ぶ新居浜修道院姉妹

木材と採光を工夫し、竹を支柱とした祭壇など日本的な落ち着いた聖堂で毎朝のミサを中心に、わたしたち小共同体（現在5名）の修道生活の歴史は繰り広げられて来ました。

わたしたちの使徒職である聖マリア幼稚園は昭和15年に、新居浜教会内にあった聖園（みその）マリア園を譲り受け、昭和26年に敷島幼稚園、昭和35年に聖マリア幼稚園と名称変更しました。

昭和36年に現在地、繁本町に修道院と幼稚園を新築落成移転しました。周囲には新居浜の中心部というべき市役所、消防署、郵便本局、NTT、そして広々とした中央公園に噴水が溢れ、歴史をもつ緑の大木が繁る一宮神社の静かな境内もあります。

教職員が出勤時にその日のための神さまの光りと力を願って、ご聖体の前でひざまづいて祈る姿は最高です。

神さまによって、明るく生き生きとした幼児教育が展開されています。今もすぐ近くの保育園から、はつらつとした歌声が聞こえてきます。「ぼくらはみんな生きている。生きているからうたうんだ・・・。」

ご聖体を中心としたわたしたち修道者の一致の生活は何としあわせでしょうか。修道者一人ひとり、教職員一人ひとり、園児一人ひとり、かけがえのない存在です。教えるというより純粋な園児たちに教えられ励まされる今日この頃です。

聖堂を訪問し祈る子どもたち

ひと

老いてもできることを精いっぱい

阿南教会　答島久子　さん（83歳）

「神は導き守られる。そして必要なものを準備してくださる」

答島久子さんの信仰の原点はご両親とも信者であり幼児洗礼を受けていることでした。

小学２年生の時、第２次世界大戦がはじまり、お父さんが招集に会い、お母さんの手伝いをしながら、３人の弟妹を世話もしていました。色々な苦労の中で、敬虔なお母さんの感化を受けて、日々の祈りとミサに参与し、神様と共に生きてこられました。

ご主人もキリスト者としての家庭をめざし、生活と信仰を結びつけることに心を注がれました。

子どもたちは、まだ幼い時に神のもとに召されましたが、その生き方に勇気をもらったそうです。

高齢となられた今は、一人暮らしをしながら、念願であった聖書の勉強、油絵、俳句、そしてボランティア活動にも加わられています。動きが緩慢になり活動が出来なくなり、「ここにいてくれるだけでいいから、続けて下さい」といわれた時は、涙が出るほどに嬉しかったと、述懐されています。

これまでの人生、神様がいつも目を掛け守り、その都度必要なものを準備してくださり、導き成長させてくださったと感謝の日々です。

そして今も、教会共同体のために、自分のできることを精いっぱいすることで、信仰を伝え、繋ぐことになると信じておられます。

阿南教会　天羽千賀子

『典礼奉仕』のために (27)

典礼ひとくち解説　その４
「典礼における信徒の責務」

高松教区典礼委員長　谷口広海

「典礼は信徒が関わるべき仕事ではない」、「ミサや儀式のことは司祭に任せておけばよい」という言葉がよく聞かれます。

1962年から1965年までに開催された第2バチカン公会議の初穂として位置づけられている「典礼憲章―Sacrosanctum Concilium」は1963年12月4日をもって承認されました。

その「Reception-受容」は現在でも教会にとって大きな課題となっています。

その中で、「特に教区と小教区における典礼生活の促進は聖職者だけではなく信徒の責任と考えるべき」であることを高らかに謳っています。

ここから励まされて、信徒は「典礼憲章」や「ミサの総則」といった典礼法規、規範の中で合法的に指導司祭と協働する喜びをが与えられています。

そのためには司祭にも信徒にも典礼の学びが薦められていることは、いうまでもありません。

典礼やその奉仕に親しく近づき、典礼生活を日常とするよう努めることが大切です。

具体的には大人も子供も香部屋係りや、侍者、聖歌、聖堂係等の典礼奉仕に親しみながら、ミサで使用される祭具類に触れ、典礼暦を表す他の典礼祭儀と自分との直接的なつながりを身をもって体験することが大事になります。

そうしながら典礼祭儀への奉仕は聖職者だけの特権ではないという意識も育つのだと思います。

とはいっても、教役者と奉仕者の間には典礼に関する聖職位階の管轄権があります。各々に任された奉仕を誠実に果たすことにも目を向けましょう。

さらに、祭儀への積極的参加という意味では、「司祭と助祭および奉仕者の動作と姿勢、ならびに会衆の動作と姿勢は、祭儀全体が優美さと高貴な簡素さによって輝き、祭儀の個々の部分の正しく十全な意味が理解され、全員の参加が促されるよう、なされなければならない。それゆえ、個人の好みや自由裁量に対してよりも、総則とローマ典礼様式の伝統的な実践によって定められたこと、ならびに神の民の霊的共通善に寄与することに対して注意が向けられなければならない。すべての参加者が共通の姿勢を守ることは、聖なる典礼のために集まったキリスト者共同体の成員の一致のしるしである。それは、参加者の意向と心情を表現し、はぐくむものだからである」としていることも忘れてはならないでしょう（総則42）

召命促進するために祈りや雰囲気作り

教区一粒会集会

12月3日(土)四国会館地下聖堂にて、10名の参加者と共に、フランシスコ・ザビエル祝日ミサをもって一粒会集会を始め、その後昼食を挟んで会議を持ちました。

熱こもる討議となった委員会

各地区・ブロックの報告では、教区の召命のための祈りや小教区で作った召命のための祈りを欠かさず唱えることの大切さ、厳しい家庭財政状況の中での、教会維持費や一粒会献金確保の工夫、神学生の小教区訪問交流や親睦の重要性等が出されました。

また、今後の高松教区召命促進と、3月20日予定のヨセフ助祭の司祭叙階式と高山祭壇奉仕者の助祭叙階式を教区を挙げて豊かなものにするために、以下のアイディアや意見が出ました。

召命促進のために

★地区・ブロック・小教区の評議会で召命促進を話し合う

★召命の祈りを各教会に日にちを振ってリレーで行う

★将来の教会を担う青少年の声に耳を傾け、その考えや意見を取り入れる

★「召命は教会が育てる」ことから、教会に若者を受け入れ、召命を育てる雰囲気を創ること、それをあきらめない

★教区報を活用し、一粒会記事や聖職者の召命体験記を定期的に掲載する。

叙階式のために

★多くの若い人たちが叙階式に参列できるよう、彼らへの呼びかけや高松までの移動手段の確保をする。

★祈りの霊的花束の呼びかけを通して、叙階式の意識を高める

これらを単に挙げるだけでなく、実行に移すため真剣に取り組むことができるよう、皆さんの地区・ブロック・小教区でご検討いただきたいと思います。

ブラザー八木信彦

小さな教会で七五三

伊予三島教会

伊予三島教会は四国の中でも小さな教会です。教会には、日本人のほか、フィリピン人やベトナム人が来ます。

教会に来ているフィリピン人のうち、3家族は四国中央市に定住しています。その他の若者たちは、四国中央市で1か月勉強した後3年間日本で仕事をするために次々と各地へ派遣されて行きます。また、ベトナムから来ている若者たちも3年間働いた後、帰国していきます。

私たちは、一つの家族として神様の恵みをいただくために一緒に集まります。

そして、日曜日のミサの後に、お茶会をしたり、第1日曜日のミサの後に勉強会をしたり、また信仰を深めるために、第1・第3木曜日には聖書的な音楽を聴き、お祈りをしています。

家族として一堂に会し賛美する幸せ

そんな小さな共同体の教会にも4人の子どもたちがいます。4人の子どもの父母は皆フィリピン人です。

11月13日、この日のミサには、2人の子どもが参加しました。神父さまは、お説教の時に「子どもたちに親として一番伝えるべき宝物は、信仰の恵みです」と、おっしゃいました。ミサには、日本人・ベトナム人・フィリピン人が一緒に参加して、神様を賛美し、七五三のお祝いとしてみんなで特別なお祈りをしました。

放蕩息子ディベート白熱

大阪で司教と青年たちの集い

「司教と青年達は出会い、そしてWaiWai語る（以下、Wai Wai）」が10月29-30日の2日間の日程で兵庫県宝塚市の小林聖心女子学院内「ロザリオヒル」にて開催された。

この企画は、大阪教会管区の5教区（大阪、名古屋、京都、高松、広島）の青年が一堂に会し、5教区の司教様と信仰生活や人生について語り合おうというもので、2年に1度開催され、今回は3度目の開催となった。

2016年2月に高松教区でNWM（ネットワークミーティング）in四国が開催されたが、「高松でNWMをやってみないか」と打診されたのが実は前回の第2回「Wai Wai」であり、NWM in四国のアイデアはこの「Wai Wai」からたくさんのヒントを得ている。

その意味でも高松教区の青年にとってこの企画はなじみ深いのである。

今回のテーマは、いつくしみの特別聖年にちなんで、「いつくしみ　うけいれ　ゆるし」というもので、〈父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した〉という放蕩息子の福音の箇所を軸にプログラムが展開された。

テゼの集いで祈る
自然の中での昼食

最も興味深かったプログラムは「放蕩息子ディベート大会」であった。放蕩息子の福音には兄と弟そして父親が登場するが、このプログラムでは、班がそれぞれ兄派か弟派かに振り分けられ、代表者がお互いの主張を言い合うプログラムである。

兄、弟の両派とも、もっともな主張をぶつけあい、ディベートは非常に白熱したものとなった。

その後の分かち合いでは、私たちは兄のような感情を抱いたり、弟のような行動をとってしまったりと、どちらの立場にも成り得る日々の暮らしを振り返ったが、その後の神父様のお話から、この福音箇所は兄や弟ではなく父の言動に焦点を当てみることが大切だということを教わった。

2日目に行われた「個人黙想」では、自然豊かな敷地内の自分の好きな場所で、風の音や日光の温かさを感じながら黙想することができた。またこのプログラムの間、司教様と個人的にお話することもできた。

「Wai Wai」はミサをもって全プログラムが終了し、閉会した。青年は就職、結婚、生き方など様々な悩みに直面する時期であるが、そんな私たち参加者は2日間を通して、司教様方や他の参加者と交わり、語り、分かち合い、信仰や人生について考えることができた。

この「交わり」は神様が与えてくださっためぐみだと強く感じた。最後に、この企画を実行してくださった司教様方やスタッフのみなさんに感謝である。

渡辺真

助けて下さる神と共に歩む幸せ

いつくしみの特別聖年　各県の振り返り

「いつくしみの特別聖年」が終わった。バチカンでは11月20日、教皇フランシスコによる閉幕の祭儀が行われた。教皇は「私たちがいつくしみを受けたのは、いつくしみ深くなるためです」と強調した。高松教区でも11月13日（日）桜町司教座聖堂で諏訪榮治郎司教による閉幕ミサを執り行い、聖なる扉が閉じられた。同日、高松教区の各地区・ブロック信徒による、特別聖年のこの1年をどう歩んだか、振り返り発表があった。その内容を紹介する。

第１の真理はキリストの愛

香川　東讃ブロック

東讃ブロックでは、祈り、分かち合い、巡礼などを行い、多くの気づきがありました。

★人はしるしを欲しがり求めるが、しるしはすでに神様から与えられているものである。

★神様はいつくしみ深く私たちをドアの向こう側から待っていて下さる。神様の大きな愛の中に信頼してドアを開けて飛び込んでいたい。

★信者相互の協力と感謝の気持ちが以前に増して芽生え、思いやりの精神が湧いて来た

★教会の第1の真理はキリストの愛です。キリスト者がいるところでは、どこでもだれもが、慈しみのオアシスを見出すことが出来ます。

★あなたがたの父があわれみ深いように、あわれみ深い者となりなさい、裁かないでください。

★神の助けとは、神ご自身が、すぐそばに居て下さることを感じることです。神と共に歩める幸せです。

★教皇フランシスコの”慈しみの特別聖年のための祈り”を続けて唱えたい。

桜町教会　長谷川聖

閉門の祈りを捧げる諏訪司

外国籍の信徒と共に喜び

香川　西讃ブロック

最近、西讃の各小教区も外国籍の信徒が増えてきました。そこで四旬節には「いつくしみの特別聖年のためゆるしの秘跡を大切にする」をテーマに、英語、ベトナム語、スペイン語、日本語によるゆるしの秘跡を行いました。

7月に徳島教会のマザーテレサの列聖記念講演参加と、阿南教会への巡礼を行いました。

その感想として、〈全5小教区からの参加がありよかった〉・〈告解の時間があればよかった〉・〈バスの中のロザリオの祈りはよかった〉・〈＊2年に1回はこのような巡礼の企画がほしい〉等の意見があり、参考になりました。

11月20日は、西讃ブロックとして、閉幕ミサと黙想、告解を行います。一つに集まり、参加するように勧めています。

いつくしみの体験を語る地区代表者

坂出教会は、ベトナム人信徒が多く、シスターが歌唱指導したり、ボランティアの方が日本語を教えたりしています。

過日ベトナムの人たちが、私たち信徒への感謝を込めたベトナム・デイを設けて、歌、踊り、料理を振る舞って下さいました。

ベトナム人の神父様から「家族から離れている彼らにとって、教会は第二の故郷です。日曜日以外の休みの日にも教会で時間を過ごすことで、誘惑から逃れ、悪い遊びも覚えず感謝している」という言葉がありました。

坂出教会は彼らから若さや元気をもらっています。彼らの歌は非常に澄んでいて綺麗です。

この「いつくしみの特別聖年」を生きたことで、西讃ブロックも一つにまとまる機会を得て、これから良い動きが、見られるのではないかと思います。

坂出教会　藤田芙美緒

愛し合い赦し合い生きる

高知地区

高知地区（安芸・赤岡・中村・江の口・中島町）5つの教会は合同で「いつくしみの特別聖年」を振り返り分かち合いを行いました。

★この「いつくしみの特別聖年」に、深く人生を振り返ることができました。

神のいつくしみ、愛、恵み、許しの中に自分があると感じました。

神は人を通していつくしみを現わされ、神からも人からも、いつも許されている自分がいることを感じることができました。

これからも出会いを大切にし、神の思いに感謝し生きて行きたいと思います。

★今まで神からいただいたものだと思わなかったものが、水一杯の有難さのように、神から頂いたものだと思えるようになり、「いつくしみ」は、神の恵みであると気付かされました。

★「いつくしみの特別聖年」であるということを意識することによって、今まで以上に「いつくしみ」を感じることができ、心から許しを願い、愛を込めて活動することができました。

★「いつくしみ」ということを普段は意識していなかったし、意識して行動したことはありませんでしたが、改めてそれは神から力をいただいていたのだと、気付かされました。

★多くの人々との間の壁を取り払い、ありのままの自分をさらけ出し、助け、助けられ、許し、許され、神様の前で堂々と生きて行くことができたら素晴らしいことだと思いました。

★ただ祈ることしか自分にはできませんでしたが、毎日、世界中の人々の平和を祈り願うことで、何かが変わると信じています。

★いつくしみは、誰もが持っている愛、許し、平和を願う心です。神様は、一人ひとりがかけがえのない人間で、平和に幸せになるように望んでおられるのですから、自分も共に歩んで行こうと、この特別聖年に深く感じました。

★許せない人もいるが、神様は何と言っておられるのかを考えると、愛し合い、許し合う、いつくしみが分かるようになりました。

★この「いつくしみの特別聖年」が、自分たちにとってとても貴重な人生のひとコマになったと感じている人が多かったようです。

中島町教会　鶴見隆博

「お遍路さん」へもお接待

愛媛　南予ブロック

宇和島教会では、教会を神の優しさと温かさ、いつくしみという母心が信徒にとっても教会以外の人々にとっても、具体的に目に見える場となるよう黙想し実践してきました。

①外国の方々と共なる教会

宇和島教会の主日のミサの参加者の半数以上はフィリピン・ベトナムの人たちですが彼ら自身が教会の活動の主体になれる場そして主体になれるようにサポートすることは大切なことです。

実際彼らは宇和島教会で、自分たちで料理やお菓子を作ってミサ後に振る舞ったり、新たな外国人を今度は自分たちが助けたりしています。同じ境遇で、互いの痛みや苦しみに共感することにも敏感で繊細です。

そういう意味では外国人は日本においては日本人以上におん父のいつくしみの主体的担い手であると言えます。

だから、私たちは「自分たちとは全く異なる周縁での生活を送るすべての人に心を開く」ということをこれらの外国人から学ぶことができたと思います。

②巡礼者へのおもてなし

宇和島教会前の国道56号線は宇和島城の城山周辺にあり、お遍路さんの通り道になっています。

近年海外からのカトリック信者のお遍路さんも多く、宇和島教会の十字架を見て、聖体訪問に寄られています。

そういう時、お茶を飲んでもらったり、話をさせてもらったりして、兄弟的な分かち合いをすることで喜んでもらっています。

③教会の内なる宣教へ

宇和島教会の信徒名簿には、もう長い間教会を離れて音信不通、所在不明の信徒が約100名います。ご高齢の方々が多く、今宇和島教会に在籍している信徒も知らない方ばかりです。

これらの方々がもし希望される時は教会に戻れるように案内を出したり、訪問したりして連絡を取り、少しずつ成果が出ています。

④いつでも入れる教会

宇和島教会は基本的には24時間、入堂可能なようにしています。いつでもお祈りでき、巡礼者も常に立ち寄れるようにしています。お御堂の中に納骨堂があるので信者や家族、友人が来られたときに入れるようにという配慮です。

宇和島教会　後藤敏彦

神のつくしみへの信頼のうちにミサを捧げる

聖霊通し黙想、祈り、感謝へ

徳島地区

世界中で起きている悲しい事件、争い、現象の中にあって、フランシスコ教皇がこの時期に「いつくしみの特別聖年」を制定したことの意味を深く味わう期間となりました。

私達が祈り黙想し・巡礼の旅をする時また、その他様々な教会行事を行う時、共に「いつくしみ」という一つの言葉を意識しながら歩み、改めて見つめ直すお恵みをいただきました。

「いつくしみ」は、「愛」そのものであり、理不尽に思えるものも含めて神からいただく全てのものだと考えます。身近な言葉に言い換えれば、喜び・赦す・憐れむ・感謝する・悲しみを包み込む・無償で与える・受け入れる・大事にする・試練を乗り越える力を持つことです。

「いつくしみ」は、困難な時にも優しさや思いやりに支えられて、家族と教会共同体との繋がりを深くし、それを土台として「いつくしみ」を地道に伝え渡し、社会の平和の基盤となるよう導いてくれます。

「いつくしみ」は、困難な生活の中にある人々との関わりの中で感じるもの、大自然や周りに溢れているもの、心の中に働いているもので、聖霊を通して、黙想、祈り、感謝へと導かれます。

「いつくしみ」を生きる力は神様の似姿である全ての人の中に備わっています。つまり、一人一人の存在自体が神のいつくしみを体現しています。

「いつくしみ」をまず、自分がしっかりと感じ、味わうことから始まります。神様の尺度で物事を見、自分の力だけに頼るのではなく神様に委ね、そして「いつくしみ」に素直に立ち帰ることを通して、私が周りの人々に対して神様の「いつくしみ」そのものに変えられていくのです。

徳島教会　牛田久美子

四国各地から感謝ミサに参列し、新たな歩みを決意する信徒たち

神の愛深く味わい考えた

愛媛　中予ブロック

囚人番号16670番

これはアウシュビッツ強制収容所で聖マキシミリアノ・マリア・コルベ神父様に付けられた囚人番号です。私は、5月「命を捧げるほどの愛」を実践された、長崎でのコルベ神父様ゆかりの地を訪ねました。

教皇様は、昨年の12月8日無原罪の聖マリアの祭日でもあり、第2バチカン公会議閉幕50周年にあたる日に「慈しみの特別聖年」の開年となりました。

わたしたちが、この「特別聖年」を「どのように過ごし」、「これから先どのように生きるか」を教皇様は「イエスキリスト、父の慈しみのみ顔」というメッセージの中で示されました。

その一言、一言が私たちに進むべき道を教えてくださいました。

中でも、神様の「愛」ということを、多く示しておられます。聖書には「愛する者たち、互いに愛し合いましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。」と。

私たちの教会では、教皇様のメッセージを読み、味わい、みんなで「分かち合い」を行い、一人ひとりが「神様の愛」と「いつくしみ」について深く考える時間をもつ場をもちました。

また、多様化する今日、そして少子高齢化が進む教会での問題点や課題、その中で「愛といつくしみ」の心をもって生活する為にどうしたらいいか、みんなが自由に話し合う場も設けました。

冒頭に述べました、コルベ神父様、そして今年聖人となられたマザーテレサの生き方を思い、私達一人ひとりが、これからも神様の「愛と、いつくしみ」の中で、一日一日を大切に、家庭で、地域で、そして教会の中で、心をひとつにして、「神様のいつくしみ」に賛美と感謝の気持ちをもち、周りの人のために尽くす生き方を求めて、過ごしていくことができますように。

道後教会　坂本喜久夫

閉幕式で聖年の扉を潜る司祭団

4教会が合同で分かち合い

愛媛　東予ブロック

今治教会では、いつくしみの特別聖年の活動として、毎日曜日の主日ミサを始める前に、「いつくしみの特別聖年のための祈り」を信徒全員で捧げてまいりました。

この祈りは、今治教会に限らず、東予ブロックの他の3教会（西条教会、新居浜教会、三島教会）においても同様に行って参りました。

11月20日（日）には、東予ブロックとしていつくしみの特別聖年を締めくくる東予ブロック4教会の合同閉年ミサを新居浜教会にて執り行います。

この日は4教会の親睦を深めるために、閉年ミサの前にいつくしみの特別聖年についての分かち合いも予定しています。。

今治教会　西津裕次

教区スケジュール

1月

1日（日）†神の母マリア　祭　　元旦　【世界平和の日】
8日（日）†主の公現　祭
　司祭助祭懇談会in塩江（～9日）
9日（月）主の洗礼　祝成人の日
10日（火）10：00司祭評議会
15日（日）年間第２主日
21日（土）聖アグネスおとめ殉教者　記　13：00宣教司牧評議会役員会
22日（日）年間第３主日
25日（水）聖パウロの回心　祝
29日（日）年間第４主日

2月

2日（木）主の奉献　祝
5日（日）年間第５主日
7日（火）ユスト高山右近列福式in大阪城ホール
11日（土）建国記念の日
12日（日）年間第６主日　高山右近列福感謝ミサin桜町
19日（日）年間第７主日
22日（水）聖ペトロ使徒座　祝
26日（日）年間第８主日
28日（火）溝部司教逝去2週年追悼ミサin桜町 11:00

ＴＳＣ便り

寄り添い活動へ移行
大阪教会管区 仙台教区支援担当者会議

11月30日（水）大阪梅田のサクラ・ファミリア教会に於いて、大阪教会管区仙台支援担当者会議が開かれた。

管区内5教区から担当者10名、大船渡ベース長ならびに米川ベース長2名が参集し、両ベース長から現在の活動と経済状況等の報告を受けた。

米川ベースについては、教区報前号（175号）で、大阪教会管区の新たな決断として、現在支援を行っている大船渡市（陸前高田市）に加えて、米川ベースを置いている宮城県南三陸町の復興支援にも携わっていくことを決定したとの報告を掲載しています。

担当者会議での報告ではまず、災害当時の状況からある程度、日常が戻ってきている中での支援の在り方が「寄り添い」活動といった安心感の提供へと変化しているとしている。

それに伴い、ボランティア活動も人海戦術的なパワーの必要性から、例えばコーラスの提供のような自己完結性を持ったボランティアが求められていること、そして漁業と農業などの地場産業への支援についても、個人経営者への援助から、地域地場産業を体験することとの関わりを重要視するボランティアへと変貌してきていることなどが報告された。

寄り添い活動での主な活動は、災害公営住宅への入居に伴い、その結果として仮設住宅の集約が進み、地域共同体の中での人間的関わりが薄れ、孤立感を深める被災者へのケアを主体とした活動へと移行していることなども報告された。

大阪教会管区のみならず、日本の教会は少なくとも被災後の10年間を見据えた支援の在り方を基本に据えている。

また会計報告の中で、他の教会管区の支援経費は全額をカリタスジャパンからの経費に負っているが、大阪教会管区は人件費だけは同様としても、他のすべての支援経費は管区内小教区からの寄付金で賄っていること、これからは米川ベースの経費が加わるが節約も視野に運営することなどが報告された。

スタッフについても、大船渡、米川両ベース共に地元からの雇用契約スタッフとなりつつあり、ボランティア感覚との狭間での悩みも顕れて来ている。

最後に、両ベースから、この先のボランティア激減状況の中では、日常の生活に寄り添うかたちのボランティアであることと、定期的支援の重要性を理解し、深めてもらいたいとの要望をもって会議を終えた。

霊性センターを宣教拠点に
三本松教会 ザビエルの祝日に記念ミサ

12月3日、フランシスコ・ザベリオの祝日に、三本松教会が教区「霊性センター」移転の再出発記念ミサが捧げられ、高松教区にとって意味のある日となりました。

教区は2009年に閉校したRM国際神学校の施設を「霊性センター」とし、その活用を模索していました。

2016年12月現在、長期間の準備をもって「霊性センター」敷地内C棟を三本松小教区教会とし、「宣教活動拠点」としました。

またA棟は「自立支援センター」として、生きることの難しさを持つ方々のリハビリ施設といたしました。

再出発記念ミサを捧げる

健康、社会回復に向けて共に支え合いながら生活する「待つ人びと」の家です。「待つ人」であるマリア様を想い、ここを「マリアの家」と名付け、香川ダルクが運動を展開いたします。

大きな厨房施設を備えているB棟は各種集会（教会他、地域の人びとのため）や災害時避難所など、多目的用途に向けて解放する予定としています。

また「霊性センター」東側グランドは水主（みずし）村おこしのために地元の夫婦がイタリアンレストランをオープンさせました。

このように教会施設は信者のみならず、地域や多くの人々の幸い、「神の国」に向けて、神様からあずかったものといえます。

たしかに少々不便な丘の上にありますが、互いの協力と支え合いのなかで、今後の教会の新しい福音宣教の姿となると思います。

カトリックとは「全ての人びとの」という意味です。

三本松教会担当司祭をはじめ信徒の皆様の信仰とおもてなしの心がこの地域の人びとに幸いをもたらしますよう、感謝と心からのお祈りを申し上げます。

キリスト者の和解呼びかけ
一致祈祷集会に参加を

キリスト教諸教会では、1月18日から25日を「キリスト教一致祈祷週間」と定めています。それは「キリスト教一致運動」であるエキュメニズムの活動として今全国各地で広く行われています。

ご存知の通り、イエス・キリストの弟子によって始められた教会は、現在多くの教派に分裂しています。

その中で大きな出来事は1517年に起こったルターの宗教改革でした。

来年はその宗教改革の発生から500年という節目の年にあたります。

そこで来年のキリスト教一致祈祷週間のテーマは「和解ーキリストの愛がわたしたちを駆り立てています」であり、Ⅱコリントの信徒への手紙5・14-20をテキストとして、改めてすべてのキリスト者がイエス・キリストを通して和解するように呼びかけています。

もちろん、数百年に渡る問題は簡単に解決しません。しかし、イエスは福音で言われます。「求めなさい。そうすれば与えられる」（マタイ7・7）。

わたしたちはこのイエスの言葉を信じ、キリスト教の一致を願うことは決してやめてはなりません。

キリスト教の一致を目指すことは現代の教会が抱えている問題と向き合うために有益なことです。

現代の多くのカトリック教会とプロテスタント諸教派の教会は高齢化で自分の教会を維持するだけで精一杯なのです。だから、互いの一致を目的に集まり祈ることは、キリスト者の一致のための大切な一歩だと言えます。

ですから、1月18日から25日に行われるキリスト教一致祈祷週間の期間に祈りの集いがある地域ではその集まりに参加されることを強くお勧めします。

それは他教派の人々との出会いの良い機会です。その出会いから、他教派と協力できる可能性が生まれてくることでしょう。

集いがない地域であれば、「キリスト教一致祈祷週間」の期間の日曜日にあたる来年1月22日に高松教区の全教会で行われるエキュメニカルのミサにご参加下さい。

「エキュメニカルのミサ」はキリスト教の諸教派が様々な違いを受け入れながら、互いに協力してイエス・キリストの福音を宣べ伝えるよう願って捧げられます。

どうか、このミサに参加頂き、キリスト教の一致のために祈りを捧げて下さい。

エキュメニズム委員
カトリック道後教会
担当司祭　川上栄治

楽しく体動かした クリスマス会
愛和聖母幼稚園

宇和島市の愛和聖母幼稚園で12月10日（土）にクリスマス会が遊戯室にて開催されました。今年度から今まで別々に開催していた遊戯会と音楽会を一つにして行うことにしました。

それは3学期は年度の締めくくりの学期であり、子どもたちが落ち着いてそれぞれの活動に取り組み、仕上げをすることができるようにという思いからです。

練習の期間は精々2、3週間程度で、演奏や演技の完璧さよりも、子どもたちの中にあるやりたいという意欲や自分の課題として取り組む主体性を引き出し、演奏すること、身体を動かすことが楽しいと感じてもらうことを主眼にしました。

本番1週間前の通し練習では他の学年の踊りの振り付けを覚えた園児たちが観客席で一緒に身体を動かしてダンスを楽しみ、会場が一つになって一足早いクリスマスの喜びを分かち合いました。

愛和聖母幼稚園は今年、創立88年を迎えました。

創立当時宇和島市には幼稚園が二つしかなく、幼稚園に行けない多くの子どもがいるのを知った当時の主任司祭イシドロ・アダネス神父が教会敷地内に幼稚園を創設して幼児教育を通じてカトリック教会が地域社会に益することができる道を開くという目的で建てられ、それ以降現在まで宇和島市における質の高い幼児教育を担い続けています。

設立当初はほとんどの園児は無料かあるいは無料に近い保育料で迎え入れられました。それはできるだけ多くの子どもに幼い頃から神を畏れ人を愛する心を植えつけたい思いからでした。

キリスト誕生から2016回目のクリスマスは感謝のうちに盛会に終わりました。

聖劇を捧げる園児たち

うれしい初聖体

家族で奉納を担当する

ぼくは、11月6日にはつせい体をうけました。お兄ちゃんは3年生のときにはつせい体をうけて、ぼくは2年生だけどできるかなぁとすこししんぱいでした。

だけどシスター寺田やいわさきしんぷさまにいろいろおしえてもらって、はつせい体をうけることができました。

すこしきんちょうしたけど、はじめてごせい体をいただいたときはうれしかったです。きらきらに光るメダイをしんぷさまに首にかけてもらってうれしかったです。お兄ちゃんみたいにじしゃが上手にできるようになりたいです。

カトリック小豆島教会
多田そうすけ（8さい）

熊本地震へ支援を

TSCでは当面の支援を左記、福岡教区の支援窓口と、カリタスジャパン、「熊本地震」緊急募金受け付け窓口へ直接に、個人あるいは団体での寄付をお願いしています。

福岡教区
福岡中央銀行（平尾支店）
口座番号・（普通）1076206
加入者名・宗教法人カトリック福岡司教区
代表役員　宮原良治
送信者の名前のあとに「クマモトジシンシエンキン」と書いてください。

カリタスジャパン
郵便振替番号00170-5-95979
加入者名・宗教法人カトリック中央協議会　カリタスジャパン
通信欄に、「熊本地震」とご明記ください。

TSC高松教区サポートセンター
東日本大震災大船渡支援
献金入金報告（含む米巻）
（11月1日～12月7日分として）　5万円
累計（12月7日現在）　1千703万687円

編集後記

年を経るにつれ、一年が加速度的に速くなるのは自分だけだろうか。勿論「神のいつくしみの特別聖年」も超スピードで行ってしまったような気がする。でも、その〈いつくしみ〉を、ゆっくりと味わえるのはこれからの生き方にかかっているのだろう。教会の暦も新しくなり、世の暦も新しくなる。さて、己の心も新しくなったか、じっくり問いながら新たな年を受け取ろう。（J）

聖ドミニコ宣教修道女会

私たちは、自分を創造しようとするこどもを
まなび、護りましょう
暁の星学園
鳴門聖母幼稚園　高知聖母幼稚園
阿南聖母幼稚園　海の星幼稚園